

道元禪師における単伝について

晴 山 俊 英

昨年、伝戒について考察を試みるにあたり、私は道元禪師（以下道元）の一師印証について自分なりに整理・究明する必要を感じた。が、真字・仮名の両『正法眼蔵』や『永平広録』には「一師印証」という言葉は見出せない。しかし『宝慶記』を見るに、

汝須知、西天未聞兩附嘱法蔵。東土自初祖至六祖無兩伝衣。所以大千仏道為本也。（大久保『道元禪師全集』下、三七七頁）

という教えを如浄より授かっているから、当然、仏法が伝えられるとき、一人の師からただ一人の弟子へという、一子相伝の形を取ることは認識していた筈である。そうでなければ、積尊に起源を持つ以上、あらゆる仏教者が正伝であると主張しても、それを否定する余地がないからである。なお、私の使用する言葉の定義として、一師印証は、弟子は複数でも構わないというイメージがあるので、一子相伝という語でもって師資一対一の相伝を指すことにしたい。

さて、この一子相伝の自負と責任感があればこそ如浄も、

大凡世尊大法、単伝摩訶迦葉、嫡嫡相承廿八世、東土五伝而至曹溪、乃至今日、如浄則仏法之総府也。大千沙界更無可斉肩者也。（春秋社『道元禪師全集』第七卷、一六頁）

という言葉を吐くことが出来る。そしてその系譜が『正法眼蔵』『仏祖』に示されていると思われる。これを踏まえた上で、『正法眼蔵』『祠書』の「仏仏かならず仏仏に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり」（春秋社『道元禪師全集』第一卷、四三頁）という言葉を見るならば、仏法の出発点が明らかに仏にある限り、嗣法・証契・単伝という事柄も全て一子相伝の説明ということになる。

一方、これとは別に戒脈というものが存在する。文字通り授戒の系譜を示すものであろうが、第四〇回宗学大会で述べたように、僧侶に対しては理屈上、出家授戒と伝戒という二つの戒脈を想定することができる。このうち、嗣法の時の戒脈ということになれば、勿論伝戒上の戒脈がこれに該当する。

また、授戒儀よりすれば、伝戒の際には弟子が師と一体化することにより、戒脈を全て相続する状況が想定されることも述べた。つまり出家受戒における戒脈は、この時点で捨て去って、師の戒脈を弟子がまるまる受け継ぐという理屈になるであろう。だとすると、本来戒脈は嗣書と一致していなければならない。『御遺言記録』にも、

又御尋云、林際下仏照禪師嗣書、故鑒師、伝授之否。又你見之乎。義介白、此相伝不名嗣書、祖師相伝血脈。云々。義介拜見之。仰云、其云嗣書也。（春秋社『道元禪師全集』第七巻、一八二頁）

とあり、道元が血脈がそのまま嗣書であると捉えていたことを伝える。血脈の定義は少々曖昧で、法脈とも戒脈とも取れるのであるが、法脈は純粹に嗣書と対応する点よりすれば、また現在でも授戒の際に用いることを想起すれば、むしろ戒脈図として考える方が妥当なのかも知れない。

さて、上記の如くみてくると、道元の思想上には一子相伝が色濃いと思われるが、道元がしきりに強調する「単伝」という言葉に、果たして一子相伝の意図が込められているのかどうか、また、一子相伝ならば、師に選ばれなかった残された弟子達をどう考えていたのか、というのが今回のテーマである。

まず、断っておきたいのは、本来なら先ずは「単伝」とい

う言葉についての先行業績を探るのが常套手段だと思われるが、残念ながら直接的に扱っているものを見出すことができなかった。そこで「単伝」という言葉を道元の主な著述から検索してみた。ここでその一々を挙げるわけにはいかないが、その多くは単に「仏法を伝える」という程度の意でも通ずるので、特別に一子相伝の意を加味しているかどうかは判別し難い。しかし、『正法眼蔵』『仏性』には、

入室渴瓶の衆たとひおほしといへとも、提婆と斉肩ならざるべし、提婆は半座の尊なり、衆会の導師なり、全座の分座なり、正法眼蔵無上大法を正伝すること、靈山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし、龍樹末廻心のさき、外道の法にありしときの弟子おほかりしかども、みな謝遣しきたれり、龍樹すでに佛祖となれりしときは、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼蔵を正伝す、これ無上佛道の単伝なり。（春秋社『道元禪師全集』第一巻、二八～二九頁）

とある。龍樹に多くの弟子がいたけれども、独り提婆のみを正嫡として付法をしたというのが概要であるが、ここよりすれば、一子相伝という意味を込めて「単伝」と称しているようである。また、『正法眼蔵』『行持下』では、

眞丹国にはいまだ初祖西来よりさきに、嫡嫡単伝の佛子をみず、嫡嫡面授の祖面を面授せず、見佛いまだしかりき。のちにも初祖の遠孫のほか、さらに西来せざるなり。（春秋社『道元禪師全集』

第一卷、一七七頁)

といっているから、達摩以前の中國仏教界に単伝という事実を認めていない。ところが『永平広録』巻第七では、

上堂。仏法一度入震旦。一者跋陀婆羅菩薩傳來、在瓦官寺伝秦朝之肇法師。一者嵩山高祖菩提達磨尊者、在少林寺伝齊國之慧可。

肇法師之伝今既断絶、可大師之稟授弘於九州。我儼酬宿殖般若之種子、得值殊勝最上之単伝而修習。(春秋社『道元禪師全集』第四卷、六二頁)

という。ここでいう仏法とは、いわゆる仏教傳來という意ではなく、明らかに道元の認める正しい仏法であるから、跋陀婆羅菩薩及び僧肇についても是認していることになろう。僧肇が會つた人物からすると、跋陀婆羅菩薩とは恐らく仏駄跋陀羅のことになるが、僧肇の正統性を保つためには、系譜のいづれかで、密かに法脈が分岐していなければならぬ。しかし、それでは一子相伝にはならないであろう。

つまり、西天二十八祖について単伝と称する場合、一子相伝の意を込めて受け取ると矛盾を来すことになる。道元は一子相伝ならずとも正法が伝わると見ていたのであろうか。この答えは『正法眼藏』『袈裟功德』に、

二十七祖の傍出、跋陀婆羅菩薩の伝、まさに肇法師におよぶといへども、仏袈裟の正伝なし。震旦の四祖大師、また牛頭山の法融禪師をわたすといへども、仏袈裟を正伝せず。しかあればすなは

ち、正嫡の相承なしといへども、如來の正法その功德むなしからず、千古万古みな利益広大なり。(春秋社『道元禪師全集』第二卷、三〇一頁)

とある。即ち、時代的な錯乱は別として、意識としては、あくまでも傍流として捉えた上での仏法と解すべきであろう。

しかし次に、『正法眼藏』『拾遺弁道話』を見ると、

大師積尊、靈山會上にして、法を迦葉につけ、祖祖正伝して、菩提達磨尊者に至る。尊者、自ら神丹國に趣て、法を慧可大師につけき、是れ東地の仏法の初祖なり如是単伝してより、六祖大鑑禪師に至る。此の時、正に眞實の仏法、唐家に流瑯して、節目にかはらぬ旨、顯れき。時に六祖に二位の神足あり、南岳の懷讓と、青原の行思となり。共に仏印を伝持して、同く人天の尊師なり。其の二派の流通するに、好く五門開けたり。(春秋社『道元禪師全集』第二卷、五三七―五三八)

とある。まず六祖慧能の時に南岳懷讓と青原行思の二人に印証していることが注目される。さらに「五家異れども、唯だ一仏心印也」と、法脈の分岐を認めている。「如是単伝してより、六祖大鑑禪師に至る」というところから、単伝という語が、慧能以前にのみ該当すると考えれば、一子相伝の意が含まれていても、僧肇を傍流とする限り、とりあえず通ずる。

慧能の時にそれまでと異なる条件は何であるかというに、「節目」という語が何を指しているかが問題になるが、竹の

節に妨げられない融通無礙な教えが中国で花開いたと受け取ると、必ずしも一子相伝という形態を採る必要がなくなつた、ということが言えまいか。

しかし、こうなってくると、単伝の原初に一子相伝の意が含まれていたとしても、もはや大きな枠での正法の伝達という意に昇華されてしまう。つまり、一子相伝時代の附嘱を単伝と称するにしても、現前の仏法の正しさを証明するためには、単伝の内容との段較が試みられるわけで、これが合致した場合に正法が成立する。そして一旦正法が成立してしまふと現前の仏法がそのまま単伝であるという表現も可能になるのであり、そうなるで一子相伝の限定的な意味での単伝ではなく、普遍的な、正法であることを裏付けけるものとして単伝という言葉が使用される。『永平広録』巻第七には

仏祖単伝、唯是我釈迦牟尼仏之正法也、阿耨多羅三藐三菩提也。所以須知、仏法之中有法華・華嚴等、非法華・華嚴等各各之中有各各之仏法也。然則法華・華嚴等八万四千法蔵、悉是仏祖単伝也。非法華・華嚴等外别有祖師道也。所以不可与諸宗比肩也、唯如國之得王也。（春秋社『道元禪師全集』第四卷、七四頁）

とあるのが、その事情を表していると思われる。ここでは単伝という言葉そのものが、正法に展開している。ここから想像を膨らませるなら、一子相伝的な意味で始まったかも知れない「単伝」の「単」ではあるが、諸法を貫く根源としての

「一」を表した「単」と受け取ることも可能になる。

さて、以上のことを整理してみると、「単伝」には、原初的には師資一対一の意が含まれていると思われること、六祖以下について一対一ではなく、いわゆる一師印証にても正法の流通が可能になったこと、それに伴う格好で、現前の仏法が正法であることの証明として「単伝」が用いられていること、が挙げられる。しかし、『正法眼蔵』『葛藤』のいわゆる達磨の皮肉骨髓が一等であるという話との齟齬が指摘されるし、僧肇周辺の系譜から正嫡と傍出の関係についても、もう少し詳しく検討してみる必要があろう。また、理観と覚心の戒脈の相違の解決も見えていない。更に、道元自身の時間的な境涯の変化の有無を考慮していない。かような問題を認識しつつ、今回は筆をおきたい。（注記は割愛）

〈キーワード〉 道元、一師印証、伝戒、嗣法

（曹洞宗宗学研究所周員）